

令和 3 年 8 月 17 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04729

研究課題名(和文) 大正昭和初期古典教育論の実相の解明と中等教科書データベースの構築に関する基盤研究

研究課題名(英文) Basic research on the clarification of the reality of the theory of classical education in the early Taisho and Showa eras and the construction of a database of junior high school textbooks

研究代表者

菊野 雅之(kikuno, masayuki)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90549213

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：翰林大学校日本学研究所・立教大学日本学研究所主催の「東アジア文化権力研究学術フォーラム 伝統と正統性、その創造と統制・隠滅」というシンポジウムにおいて「近代国語教科書における教材化の力学」という発表を行い、教科書研究の方法論および古典教材の分析法について明らかにした。令和2年度第75回北海道国語教育研究会 十勝・帯広大会においても、教科書分析の方法論、授業構築についての助言を通じて、授業実践の構築の方法論について知見を深めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで国語科教育学は研究と学習指導要領(教育行政)との関わりはつかず離れずの微妙な距離感のなかで形成されてきた。これについて歴史的知見から批評的に論じ、教育学における国語科の指導内容の検討の視野を拡大していく必要があるだろう。そのために歴史研究と現在の学習指導要領のあり方を紐付けながら論じる研究スタイルが求められる。加えて、古典学習に関する研究方法や研究体制についての知見が蓄積されたこと、それに参画する研究協力者を实际的に募ることができたことは今後の研究の進展にも大きな意義があった。

研究成果の概要(英文)：At a symposium on "Tradition and Legitimacy: Creation, Control, and Extinction," organized by the Institute of Japanese Studies, Hallym University and the Institute of Japanese Studies, Rikkyo University, I gave a presentation on "The Dynamics of Teaching Materials in Modern Japanese Textbooks" and clarified the methodology of textbook research and analysis of classical teaching materials.

研究分野：国語科教育学

キーワード：国語科教育学 教科書分析 学習指導要領

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

平成20年度版学習指導要領において「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が小中の各校種に位置付けられた。古典教育論の確立・精練は喫緊の課題だが、古典を学ぶことの根源的な理論の追求はかたわらに置かれたまま、教育実践が積み重ねられている。研究代表者は古典教育を推進する立場にも、否定する立場にもいない。実証的な調査によって、公教育における学習対象の理論的な根拠を解き明かし、未来の国語科教育の理論形成を旨としている。

その理論形成は現在の諸状況の分析に留まらず、教育史全体への大きな視野も必要となる。明治大正昭和初期におけるいわゆる旧制の中学校国語科教育に関する研究は、現在、若手中堅の研究者が数名おり、その研究の重要性への認識は以前と比べて深まりつつあるとは言える。しかしながら、それらの研究業績は個々の論文としては示されているもののまとまった書籍として示されたものは野地潤也(1998)の一書に留まっている。

また、旧制中等国語教科書に関するデータベースという点から言えば、田坂文穂(1984)の仕事がすでに存在する。しかし、その検索性や精度には課題があり(目次が単元名のまま記載されており教材の出典が不明。同じ教科書名でも改訂のたびに教材編成が異なることを踏まえていない等々)各読本の目次を一覧で見ることできない。中等国語読本の全貌を素早く的確に把握しようとするためのツールはいまだ存在しない。

2. 研究の目的

なぜ古典を学ぶのか。さまざまな古典教育論が示されてきた。それらの論はグランドセオリー(広く共有された理論)になることはなかった。そもそも古典という存在自体が、近代の国民国家論の申し子であり、ナショナリズムの枠組みで語られることに終始してきたことに原因がある。本研究では、上田万年・保科孝一・西尾実に焦点を当て、古典と国民国家論の不即不離の関係性について実証的に明らかにし、古典とナショナリズムの議論を対象化し、言語能力を育むための新たな古典教育論を議論するための基盤を形成することを旨とする。また、それに並行して明治大正期の国語教科書の目次・出典等を整理したデータベースを作成する。加えて、大規模データベース構築に向けての学会のコンセンサスの形成を旨とする。

3. 研究の方法

歴史史料から古典教育の理論的背景を整理する<理論研究>と旧制中等国語教科書教材の配置を総覧可能とするデータベース構築に関する基礎的研究を行う<並行研究>の2つの計画を並行して進め、両研究で得られた知見を総合させ、相乗効果による研究の大きな進展を旨とする。<理論研究>では、近代の「国語」の形成に寄与した上田万年と保科孝一、戦前戦後の国語科教育の支柱となった西尾実の3名の教科書の編纂意識に焦点化し、その実態を明らかにしていく。<並行研究>では旧制中等国語教科書のデータベース構築の基礎的作業を確実に進め、より大規模なデータベース構築研究計画のための基礎的研究を進め、近代教育史研究への大きなツール構築の布石とする。

4. 研究成果

【歴史研究コンセンサスの形成】

2018年の全国大学国語教育学会(武蔵野大学)において、協同研究者である府川源一郎氏を中心に、戦前国語教科書データベースの考え方に賛同する研究者らが情報交換を行う場を設けることができた。これをきっかけにし、メールでのやりとりを通じて、大規模データベース構築に向けてのコンセンサスの形成に成功し、そのコンセンサスに基づいて、全国規模の学会におけるラウンドテーブル開催に漕ぎ着けた(全国大学国語教育学会茨城大会 茨城大学 2019年6月予定「社会的リソースとしての中等国語読本・女学校国語読本・文法読本データベース作成に向けて データベース作成の意義・視点・方法・対象・先行研究について」コーディネーター: 菊野雅之 登壇者: 八木雄一郎ほか)。研究代表者はそのラウンドテーブルのコーディネーターを担い、共同研究者である八木雄一郎も登壇者として出席することとなっている。加えて、教科書分析に必要な観点や知見(読むこと、書くこと、指導事項に基づいた言語活動・学習活動の分析方法論)を深める観点・業績も着実に積み重なり、データベース作成に向けての基礎的な土台も引き続き固められてきた。6月に行われるラウンドテーブルでは、コンセンサスを共有するだけに留まらず、用語の確定、具体的な作業手順、データベースの範囲、作成の際の留意点、作成の意義と価値といった広範にわたる内容について積極的に協議し、引き続き研究が確実に実行されるために必要な内容を固めていきたい。

【古典学習構築論の前進】

2021年度全国大学国語教育学会5月オンライン大会において、「国語科教育学は古典の学習をどのように捉えてきたのか」というタイトルのシンポジウムを開催することにコーディネーターとして関わり、準備中である。なお、その旨も論文化される予定である。また、往来物に寄せられた教育的効果についても述べ、近世における『平家物語』の教材性を把握するに至った。また、ここ数年の『平家物語』研究の概要についても整理を行い、教科書掲載古典教材の研究のための基礎的な知見の強化を行った。芳賀矢一・保科孝一らの編集した国語読本の目次データの作成・収集・精査も着実に進捗し、明治期教科書関連の著書の出版にも至っている。また、古典

学習論の歴史的経緯や今後の新しい学習論の進め方についてまとめた書籍が、二校の段階に入っており、2021年度内には出版されている予定である。加えて、2021年度全国大学国語教育学会5月オンライン大会において、「国語科教育学は古典の学習をどのように捉えてきたのか」というタイトルのシンポジウムを開催することにコーディネーターとして関わり、準備中である。なお、その旨も論文化される予定である。

【学習過程の明確化をふまえた学習指導略案のフォーマット開発およびモデル作成】

小学校教員や帯広の中学校国語科教員らとともに、指導事項が学習過程の並びに配置されていることを受け、単元構想を行う際の指導案略案のフォーマットを共同で開発した。従来 of 指導案よりも書くべき内容を精選し、作成の手間の削除、伝達内容の精練を図った。加えて、そのフォーマットに基づいた授業構築・単元検討を教員と今年度は行い、一定の成果を見た。

【中学校国語科における定期テスト作成過程の方法論の構築】

中学校教員とともに定期テストの改善を通じた授業全体の改善の方法論について検討を行った。ともすれば国語科の定期テストは、直前にノート内容や教師の解釈を暗記し、それを解答欄に書くといったおおよそ、思考力・判断力・表現力を問う問題としては不適切な形式で実施されることが少なくない。これは評価方法についての議論が不十分であること、定期テストの作成方法・評価方法の議論が不十分であることを示している。そこで必要となるのは大きく二つの視点である。指導事項に基づいた問題作成方法の確立。教材発掘・開発の方法・観点の整理である。指導事項に基づいた問題作成については、問題構想表を考案し、実践を通じてその効果を検証し、その成果を論文として投稿する準備を進めている。また、教材発掘・開発を含めた成果の全容の発表を、書籍として発行する計画が進められており、すでに出版社編集社とのやりとりを終え、執筆段階に入っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 菊野雅之・佐々木来望	4. 巻 1
2. 論文標題 中学校国語科における定期考査作成過程の検討 全国学力・学習状況調査・高校入 試・学習指導要領を土 台にして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 全国大学国語教育学会国語科教育研究	6. 最初と最後の頁 249-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菊野雅之・小笠原拓・信木伸一・八木雄一郎	4. 巻 1
2. 論文標題 近代日本における中層エリートの意識基盤としての教養形成の実相の解明 社会的リソースとしての中等 国語読本・女学校国語読本・文法読本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語科教育研究	6. 最初と最後の頁 303-306
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菊野雅之	4. 巻 3
2. 論文標題 ショートショート&ミステリとしての『夏の葬列』の可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育出版国語科通信 北のことは便り	6. 最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菊野雅之	4. 巻 39
2. 論文標題 全国学力・学習状況調査の問いと教科書教材を結びつけ、授業改善に生かす	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 道標	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島田俊哉・八木雄一郎	4. 巻 14
2. 論文標題 諸本比較を採り入れた『平家物語』の授業実践 高野本・延慶本の比較を通して「扇的」を読む(中学校第2学年)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 273-286
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 府川源一郎	4. 巻 第1巻 1-2合併号
2. 論文標題 国語科学習指導論：「読むこと」の学習指導の変遷(特集 教科 学習指導論)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本体育大学教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 17 - 33
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 府川源一郎	4. 巻 第2巻第2号
2. 論文標題 国語科学習指導論：国語科教育特論：作文指導における「自己表現」の展開(特集 教科教育特論)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本体育大学教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 7 - 21
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菊野雅之	4. 巻 57
2. 論文標題 B問題構想表とメンター制の導入 「小学校国語科教育法」実践報告(その2)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道教育大学語学文学会	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菊野雅之	4. 巻 37
2. 論文標題 古典は誰のものか 保科孝一の言説をきっかけに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 横浜国大言語研究	6. 最初と最後の頁 右 1 -164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島田俊哉・八木雄一郎	4. 巻 13
2. 論文標題 文学的文章の学習指導における「続き物語」の採り入れ方 「星の花が降るころに」(光村図書・中学校第1学年)の実践から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 154-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 龍野直人・八木雄一郎	4. 巻 13
2. 論文標題 作文への意欲を高めるための「取材」活動のあり方 「自己PR文」を書く単元(小学校第5学年)を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 166-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊野雅之	4. 巻 43
2. 論文標題 近世における『平家物語』の教材性 素読・書写のためのテキストとしての様相	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 横浜国大言語研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菊野雅之	4. 巻 54
2. 論文標題 研究展望「平家物語（2015年10月～2016年9月）」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 軍記と語り物	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菊野雅之・小笠原拓・信木伸一・八木雄一郎
2. 発表標題 近代日本における中層エリートの意識基盤としての教養形成の実相の解明 社会的リソースとしての中等国語読本・女学校国語読本・文法読本
3. 学会等名 全国大学国語教育学会茨城大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊野雅之・佐々木来望
2. 発表標題 中学校国語科における定期考査作成過程の検討ー全国学力・学習状況調査・高校入試・学習指導要領を土台にしてー
3. 学会等名 全国大学国語教育学会仙台大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥泉香・府川源一郎
2. 発表標題 Multimodal Analysis on Japanese Written Text as Device that has been Made Social Dividing, Merging and new values
3. 学会等名 91COM MULTIMODALITY
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊野雅之
2. 発表標題 学習指導要領を読むことを改めて考えるー次期学習指導要領を見据えつつー
3. 学会等名 釧路国語教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 八木雄一郎
2. 発表標題 「続き物語」の創作と交流がもたらす学び～中学生作品の傾向から～
3. 学会等名 信州大学国語教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 藤森裕治・秋田喜代美・八木雄一郎他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 読書教育の未来	

1. 著者名 府川源一郎	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 245
3. 書名 「ウサギとカメ」の読書文化史 イソップ寓話の受容と「競争」	

1. 著者名 府川源一郎	4. 発行年 2017年
2. 出版社 富山房インターナショナル	5. 総ページ数 1-9,889-918
3. 書名 『国語讀本 高等小学校用』坪内（逍遙）雄蔵著 富山房インターナショナル	

1. 著者名 八木雄一郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 57-66
3. 書名 初等国語科教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	府川 源一郎 (fukawa genichiro) (00199176)	日本体育大学・児童スポーツ教育学部・教授 (32672)	
研究分担者	八木 雄一郎 (yagi yuichiro) (80571322)	信州大学・学術研究院教育学系・准教授 (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------